

協会誌名変更に当って

浅原照三*



本協会誌が「塗装の技術」(Painting Engineering)として発刊されてからもう10年半の歳月を経過した。協会発足当時は会員の共通の広場としての会誌発行の意慾もなく、会の行事としては実習を伴う講習会があった程度で、内容的には当時の東京都工業奨励館塗装部会の形式をとっていた。

しかし会員の増加とともに会誌発行の意慾も昂まり、塗料出版社の御厚意によりその一部に塗装協会のページを設けていただき、会員への連絡が雑誌面を通して初めて行なえるようになった。

会員へのコミュニケーションの重要性がや々と役員の間でも分りはじめた第一歩であろう。

私の乏しい経験からいっても、当時行なったこのような会員へのサービスでさえ喜びを感じねばならぬ程協会の財政は貧困そのものであった。

自力で協会誌を持ちたいという意慾だけは旺盛であったため、広信社の八木社長の献身的ともいえる協力を得て協会誌の発行にこぎつけ、1966年12月、発刊の生ぶ声をあげた。

誌名については役員の間でも種々の意見が開陳され、諸種の呈案がなされたが、これは塗装関係の市販誌、新聞名などの持つイメージと異なるものへの模索でもあったろう。「塗装工学」、「塗装の技術」という名称にしぼられては来たが、「塗装工学」ではまりにもアカデミックすぎるとの意見がつよく、結局市販誌のイメージには近いが「塗装の技術」でゆくことになった。

雑誌はスタートしたが、もりこまれるべき内容についても議論百出であった。発足して間もない協会のことでもあり、工業会と混同して考える役員も多かった。しかし目的を「塗装技術

者」のための協会誌の発行：換言するとユーザーに対する塗料、塗装機器、塗装試験器のメーカーのPRにおき、塗装技術の向上をはかるといふ点で全体の統一をとることにした。

一時期会長をやめていたこともあったが、協会の運営はあくまで人によって行なわれるものであると同時に、協会行事の実施と協会誌の発行は車の両輪のようなものであるとの認識の上に立って初めて円滑な会の活動が期待されるのである。

ここ数年企画委員会、編集委員会が経となり、研究部会が緯となって徐々にではあるが本協会には堅実な歩みを続けている。

アメリカ式に言えば工学(Engineering)は技術(Technology)の基礎をなすものであるから、協会の発展とともに工学へ推移する時期があることは予想していた。いいかえると「塗装の技術」という誌名はいずれ「塗装工学」に変更されるであろうという予想であった。

私の考えは、会員層の厚さの増大が先行するという条件が満たされることが必要だという意味である。しかし現実面においては会員、非会員をとわず本協会誌名が市販誌名に類似していること、内容の類似点(これは読者によりかなり異なった印象の分布があるが)などの点から今度思い切って誌名の変更にふみきった次第である。これと同時に本協会誌は第2次情報誌としての役目をはたすとともに内容の充実、塗装人のための協会誌としての役割を果たすであろうことを期待している。それとともに近い将来、別冊の形か、部会誌の形かは問わないが、「塗装教育」誌的なものが出現することにより、実務者のための協会でもあることを十分各会員に認識していただきたいと考えている。

* Teruzo ASAHARA 東京大学名誉教授・本会会長 (〒150 東京都渋谷区恵比寿4-5-27)